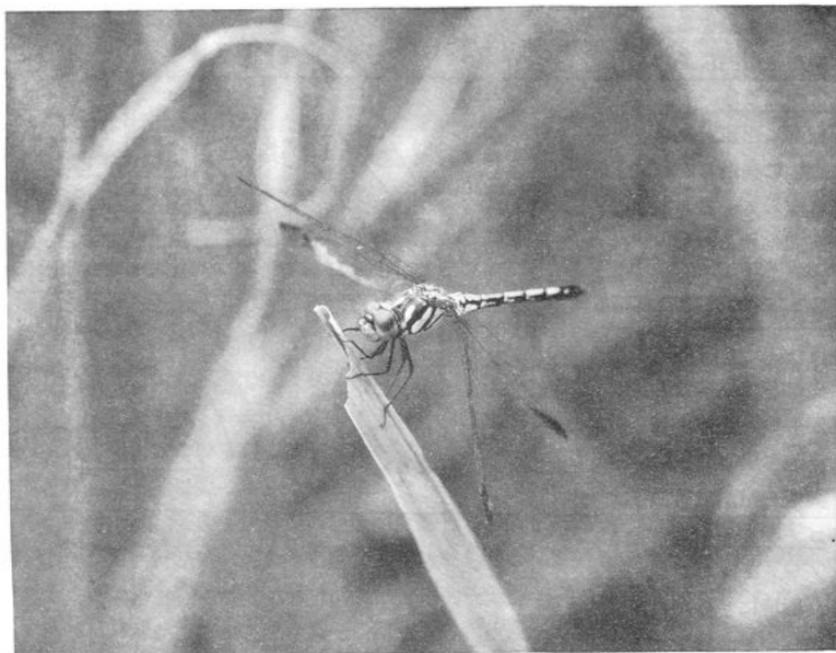


市川自然博物館

10・11月号 (通巻第22号) だより

今月号の特集

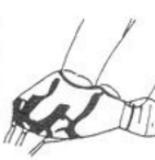
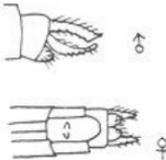
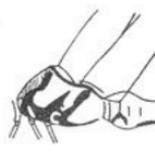
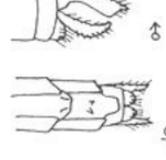
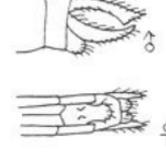
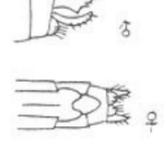
赤とんぼ[♂]たちの個性



▲ノシメトンボ

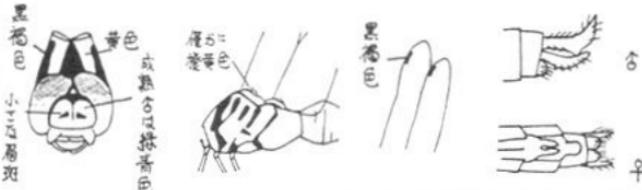
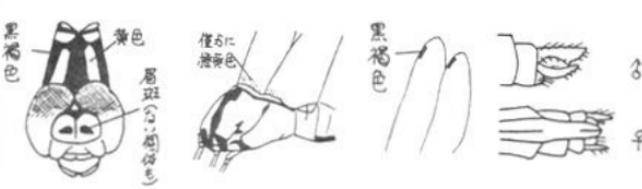
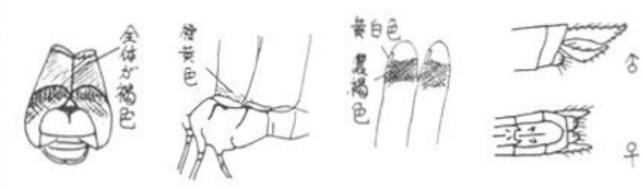
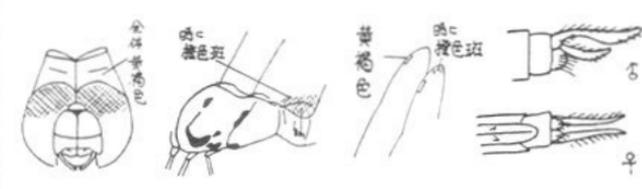
特集 赤とんぼたちの

「赤とんぼ」——日本人の心に響き、風景までも連想させるこの名前は、体が赤くなるトンボの総称です。例えば、アカトンボ属というグループには、日本で21種類ものトンボが含まれています。それらは、模様も大きさも、生態も異なるトンボたちです。捕らえ、観察し、放す——飛んでいる時には見えなかった彼らの個性は、手にとって初めて見えてきます。今回は、市内で見られる『赤とんぼ』の特徴を図解しました。

種名と生態	顔と胸の前面の模様	胸の側面の模様	翅の模様	腹の先端の形 (♂側面 ♀底面)
<p><u>ナツアカネ</u> 初夏ころから黄褐色の個体が目につく。秋になると顔まで赤く染まる。 中型・市内に多い</p>	 <p>全体が褐色</p>		 <p>褐色</p>	 <p>♂ ♀</p>
<p><u>アキアカネ</u> 梅雨に出現。夏は高地に移動し、秋に戻ってくる。腹が赤化する。 中型・市内で普通</p>	 <p>全体が褐色</p>		 <p>褐色</p>	 <p>♂ ♀</p>
<p><u>ノシメトンボ</u> 夏～秋、林縁の枝先などで見ることが多い。全体が暗赤色に染まる。 大型・市内で普通</p>	 <p>褐色 黄色 小なる黒斑</p>	 <p>腹かに暗黄色</p>	 <p>黒褐色</p>	 <p>♂ ♀</p>
<p><u>コノシメトンボ</u> ノシメトンボと似た環境にすむが、秋、全身が鮮やかな赤に染まる。 中型・市内では稀</p>	 <p>褐色 黄色 早に黒斑</p>		 <p>黒褐色</p>	 <p>♂ ♀</p>

個性 捕らえ、観察し、放す

キャッチ&リリースのすすめ

<p><u>マイコアカネ</u> 夏～秋、湿地と周辺の林に生息。顔が緑青色、腹が鮮赤色で美しい。 小型・市内では稀</p>	
<p><u>マユタテアカネ</u> 夏～秋、湿地と周辺の林に生息。翅端に褐色の帯が出る個体もある。 小型・市内で極稀</p>	
<p><u>ヒメアカネ</u> 夏～秋、湿地と周辺の林に生息。マユタテアカネに似る。鮮赤色になる 小型・市内で極稀</p>	
<p><u>ミヤマアカネ</u> 低山帯～山麓部に生息し、市内では偶発的に観察される。翅の帯が特徴 中型・市内で極稀</p>	
<p><u>ウスバキトンボ</u> 上記8種と別属で赤化もしないが、農地や河原でよく群舞している。 大型・市内に多い</p>	

参考文献： 浜田 康・井上 清 「日本産トンボ大図鑑」 (講談社)



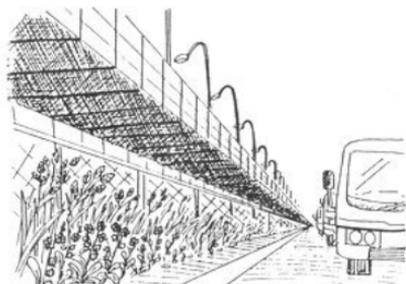
街かど自然探訪

おじゃまします!

加藤新田・湾岸道路の帰化植物

加藤新田をはじめ高浜町・千鳥町・塩浜1～3丁目の一帯は、自然豊かな干潟を埋め立ててつくった造成地で、多くの工場が連なる工業地帯です。そこを貫く湾岸道路は首都圏の産業を支える物流上の大動脈で、連日、たくさんのトラックやトレーラーが行き来しています。

昔から、人や物資の流通経路は、海外からの生物の進入経路として知られていました。古くは線路や港が主要経路でしたが、今日、特に植物の進入経路として道路の果たす役割は大きくなっているようです。湾岸道路沿いでも、マンテマ、ウラジロチチコグサ、ハナヤエムグラ等の進入が近年になって発見されました。



やってみよう! みてもみよう!

イコズチ



ひっつきむしのしょうたいは、
植物のみ



ナゲミササ



オナモミ



ヌスビトハギ



どうやって
くっつくのかな

動物や人間のからだに
ついて、とおいに
はこばれます



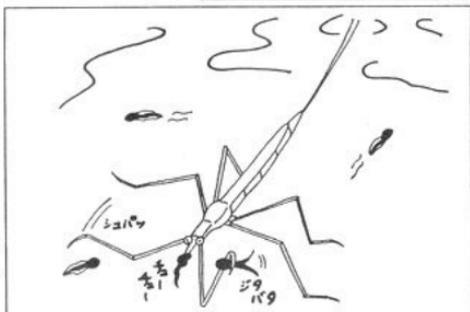
アメリカセンダングサ

24

市川の こん虫 **ミズ カマキリ**



ミズカマキリは、分類上はカマキリと縁遠く、また、鎌のように大きな前足や、三角形の顔もしていないので、ちょっと見た限りでは「水中にすむカマキリ」という名はピンときません。しかし、飼育しているミズカマキリに餌を与えた時の振る舞いは、カマキリの動きそのものです。小さなおたまじゃくしを捕らえ、



その体液を吸っているそばから、左右の前足を巧みに、しかも素早く振り回して右に1匹、左に1匹と捕らえるのです。この時、細長い前足は水の抵抗など感じないかのように、鎌のごとくに動かされます。

市内でのミズカマキリの生息状況は、よくわかっていません。しかし、プール開き前のプールで、ミズカマキリやその他の水生昆虫が観察されるといわれています。

むかしの市川 ～ その18 ～

オオムラサキ

中学生の時（昭和15年頃）、夏休みの自由研究に昆虫採集をしたことがあります。捕虫網を持ち、国府台や里見公園に出かけ、ゴマダラチョウやコミスジなどを追いかけているうちに、美しい大形の蝶が、高い木の梢を旋回しているのを見つけました。オオムラサキです。高いところばかり飛んでいて、なかなか下には降りてきません。いろいろ考えた末、厚いボール紙を、てのひら大に切って下から投げ上げてみました。命中すれば落ちてくると思ったのです。ところが、実に奇妙なことが起ったのです。オオムラサキは飛んできたボール紙を追いかけ、し



かも落下するボール紙を追うように舞い降りてくるではありませんか。私は、まんまと捕虫網の中にオオムラサキを捕らえることができました。オオムラサキの雄は、なわばりを持ち、ほかの蝶が近寄ると追いはらう性質があることを知ったのは後のことでした。オオムラサキは、タテハチョウ科で、1957年に日本の国蝶に選ばれました。今では、ほとんど見かけなくなりましたが、私が中学生の頃には、里見公園周辺にかなりいたのです。

（博物館指導員 大野景徳 記）

ミゾソバ

10月上～下旬

タデの仲間です。水路の側など、湿地のいたるところに群生しています。



ヨメナ

11月上～下旬

観察園の湿地の比較的乾いた場所に生えています。野菊と呼ばれる野生の菊は、ほかにユウガギク、シラヤマギクなどが花をつけています。



モズ

10月～

高い木の梢で「キィーキィー、キィキィ、キィーキィー」と高鳴きしている姿がみられます。またバツヤやカナヘビを木の枝にさした「もずのはやにえ」もみつかります。

鳴く虫のなかま

～11月上旬

湿地の草むらから、屋間でも「リッリッリッ」と鳴くツツレサセコオロギや「ジ、ジ、」と鳴くヒメギスなどの声が聞こえてきます

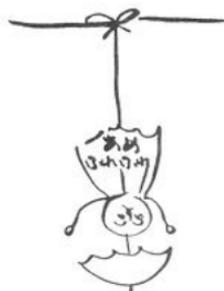
行徳野鳥観察舎 だより



夏の終わりに

8月末から9月初めにかけての10日あまりの時期は、夏と秋の交代がはっきりと目につく。夏鳥のコアジサシがさっと姿を消し、冬鳥のコガモが8月30日にもう渡ってきた。ツバメの大半は渡去し、カモが日増しに増えている。9月6日から気温が一挙に下がり、虫の大合唱がひときわみごとになった。

日照り続きの今夏。保護区内の池のいくつかはからからに乾き、無惨なひび割れを見せている。わずかに水が残る深みには、渡ってきたばかりのコガモが群れる。こういう時に心配なのがボツリヌス中毒。酸欠が続いた泥中で増殖した菌の



文と絵
・蓮尾純子

毒素に水鳥がやられる。9月6日、急性中毒のカルガモとオオバンが同じ池で拾われた。雨よ降り！ヒキガエルやマスカラットと一緒に雨乞いをしたい気分。

(行徳野鳥観察舎 0473-97-9046)

わたしの 観察ノート

1. 今年のセミの鳴き声について

前号の統報です。アブラゼミについて寄せられた情報を以下に整理しました。

7/14 (初鳴) 大町 (糠信政衛さん)	8/9 (初鳴) 行徳駅前 (八角美智子さん)
7/19 (初鳴) 国府台 (秋元久枝さん)	8/12 (初鳴) 新浜 (坂本馨さん)
7/20 (初鳴) 北国分 (松江佳子さん)	8/12 八幡 (鈴木和子さん)
7/26 若宮 (金田武士さん)	

また、「アブラゼミの初鳴きが、例年より遅い」(糠信政衛さん)

「セミの声が少ないようです」(松江佳子さん)

「8月12日、初めて鳴きました。1匹だけのようです。故郷・富山にくらべ、ここではセミの声がきこえなくて驚いています」(坂本馨さん)

という声も寄せられました。

博物館周辺では、7月22日に初鳴きが聞かれ、その後、アブラゼミはずっと低調だったのですが、8月5日に暑くなったときに盛んに鳴き、8月8日以降、やっと、いつもの夏らしく、アブラゼミとミンミンゼミが盛んに鳴くようになりました。

感覚的には、気温が低かった前半は低調で、その分、お盆前後から、残暑の厳しかった後半にかけて、取り戻した感じでした。

2. 特報・再生干潟にトビハゼのこどもが戻ってきた!

新聞等で報道されたので皆さん御存知かと思いますが、昨年、江戸川放水路で、護岸工事に合わせて、トビハゼが生息しやすい干潟を再生する試みがなされました。その再生干潟に、今年6月、保護飼育していたトビハゼ 100匹を放流し、7月にはそれらが巣穴をつくるまでになりました。

そして、9月10日、再生干潟に今年生まれの幼魚が出現したのです。トビハゼは、5～7月に孵化したのち、しばらく浮遊生活を送ります。その後、小さなトビハゼの姿となって干潟に戻ってくるのです。

再生干潟には、現在、数千匹の幼魚が生息していると推定されます。中には、この干潟でなく、行徳橋付近の生息地で生まれたものもいるでしょう。再生干潟の周辺部ではほとんど見られないので、よほど再生干潟が気に入ったみたいです。たくさんのおトビハゼが、無事、冬を越し、来年は、再生干潟の全域で求愛ダンスや巣穴が見られればいいなと思います。

☆☆☆☆ 自然博物館の行事案内 ☆☆☆☆

*自然観察会

「11月の自然観察会」

1. 日時 11月8日(日)
午前9時30分～11時30分
2. 場所 小塚山・堀之内
3. 内容 どんぐりの観察
4. 申込期間 10/26～10/31
5. 定員 20名

「12月の自然観察会」

1. 日時 12月6日(日)
午前9時30分～11時30分
2. 場所 大町周辺
3. 内容 地形と地層
4. 申込期間 11/23～11/28
5. 定員 20名

*自然とあそぼう

自然の中でおもいっきり遊んでみよう！ 3回コースです。

1. 日時 第1回 10月18日(日)・第2回 11月15日(日)・第3回 12月13日
午後0時30分～3時
2. 場所 自然博物館・大町自然観察園
3. 申込期間 10/1～10/10
4. 対象・定員 小学生と保護者 先着20組(必ず保護者が同伴してください)

申込み方法

各行事とも、往復はがきに参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、申込期間内に、自然博物館までお送り下さい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * —

博物館セミナー 1992 (考古・歴史・自然博物館共催)

博物館の学芸員が、日頃の研究成果をわかりやすく紹介します。

*自然博物館担当

10月31日(土) 『もっと、もっとトビハゼ #2』金子 謙一

双眼鏡で観察できる魚、トビハゼのさまざまな行動を紹介します。

11月21日(土) 『花粉は記録する』宮橋美弥子

土の中に残された花粉から過去の植生を考えます。

*その他の日程

- | | |
|---------------------------|--------------|
| 10月24日(土) 『堀之内貝塚 109年』 | 堀越 正行(考古博物館) |
| 11月7日(土) 『下総国井上駅について』 | 山路 直充(考古博物館) |
| 11月14日(土) 『荷風の歩いた戦後のいちかわ』 | 松岡久美子(歴史博物館) |
| 11月28日(土) 『市川市域の御一新』 | 小野 英夫(歴史博物館) |

会場：市川公民館 第1会議室(JR市川駅北口より徒歩8分)

日時：10月24日～11月28日の毎週土曜日

午後6時～8時

受講は無料です。各回ごとに歴史博物館まで、電話でお申込みください。

歴史博物館 0473 - 73 - 6351

市立市川自然博物館だより
第4巻 6号 (通巻第22号)

発行日/ 平成4年10月1日

編集・発行/ 市立市川自然博物館

〒272 千葉県市川市大町 284番地

☎ 0473(39)0477

次号は12月1日発行